

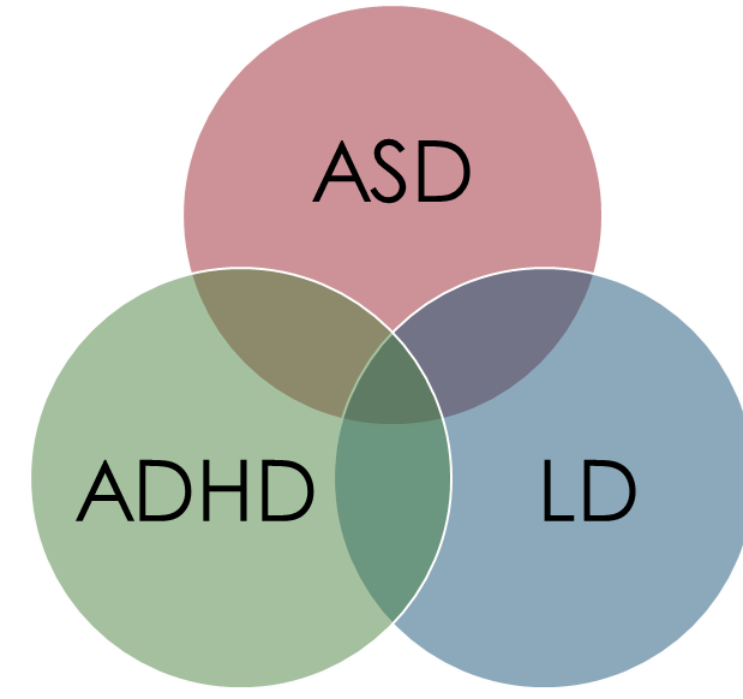
# 構築される成人女性の「発達障害」

*Constructed adult female's developmental disorder*

豊島岡女子学園中学校・高等学校 2年 齊藤唯

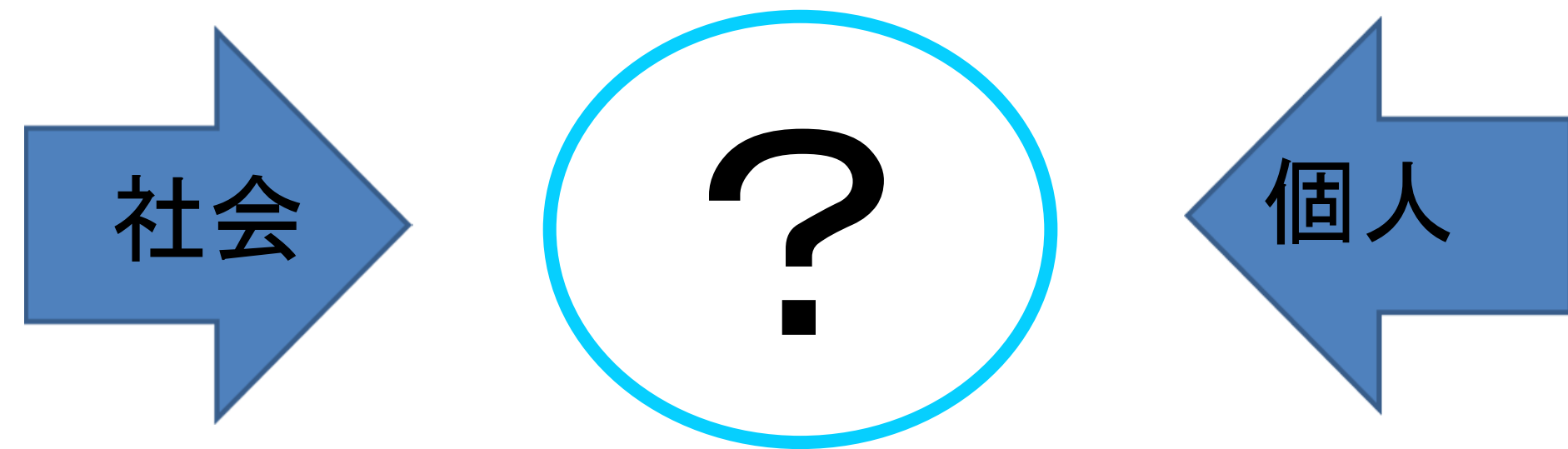
## はじめに／背景

発達障害とは、ASD,ADHD,LDなどを総称した呼び名で、生まれつきの脳の発達が原因とされている障害である。平成16年に発達障害支援法が成立された。それ以降発達障害の認知が広まったと考えられる。現在では、NHKの発達障害についてのプロジェクトの始動や、発達障害を題材にした漫画の登場などにより、さらに発達障害の認知は高まってきていると言える。発達障害者扱ったドラマの主人公は男性であることが多く、世間に「発達障害=男性のもの」という考えが定着しつつあったと言われているが、徐々に女性の発達障害も注目されてきている。女性の発達障害が初めてフューチャーされたと言われているのは、1995年にアメリカで出版され、以後日本でも広がった『片づけられない女たち』という書籍である。その後、「ザ!世界仰天ニュース」で発達障害を持つ女性の特集が組まれた。そして、最近では『リエゾン』『shrink』という漫画で発達障害の女性が描かれ、近年女性の発達障害は注目されていると言える。また、正式な医療用語ではないものの、「大人の発達障害」という言葉が世の中に定着しつつある。



## 目的

社会の発達障害の捉え方や社会情勢等によって、発達障害者個人にどのような影響を与えるのか、という研究は確認することができたことから、本研究では、発達障害者個人と、社会の発達障害の捉え方や社会情勢等の両方に焦点を当て、近年注目されている女性の発達障害を対象にして、現代の社会の状況が、発達障害者に与える影響を調べ、発達障害研究に新たな視点を加えたいと考えた。



## 方法

発達障害者個人と、社会の発達障害の捉え方や社会情勢等の両方に焦点を当て、現代の社会の状況が、成人女性発達障害者に与える影響を調べることを目的として、成人女性発達障害当事者7名のライフストーリーを分析した。

- I「発達障害に気づく前の様子(困り感)」
  - II「自身の発達障害に気づいた背景」
  - III「発達障害に気づいたときのライフステージ」
  - IV「診断を受けた後の様子(困り感)・変化」
- の四つを分析項目として設定する。

## 結果・考察①

「発達障害に気づく前の様子(困り感)」から、成人してから発達障害の診断を受けた女性は、診断前から発達障害の特性により、生活に制約を受けたり、自己肯定感が下がったりと、困り感を抱えていたことがわかる。「自身の発達障害に気づいた背景」より、発達障害を知ったきっかけは様々であるが、発達障害について知る中で、自身に発達障害の特性があることに気づいたケースがほとんどであることから、発達障害について知ることは、自身でも気づけなかった困り感に気づくきっかけとなったと考えられる。「発達障害に気づいたライフステージ」より、発達障害に気づくライフステージは様々であることが伺えるが、共通点として、一人暮らしや結婚相手との同居中に発達障害に気づいていることから、親によるサポート等がなくなり、困りごとが現れ、特性が表面化したことが考えられる。「診断を受けた後の様子(困り感)」から、発達障害の診断により、生活を改善したり、自己肯定感が高まったりと、良い方向に物事が進むようになったことがうかがえる。

## 結果・考察②

「発達障害に気づく前の様子(困り感)」で挙げられた困り感と、「自身の発達障害に気づいた背景」で挙げられた自身の発達障害を気づかせたきっかけと、「発達障害に気づいたときのライフステージ」が必ずしも一致していないことに注目した。

ライフストーリーから、困り感を抱えていたときのライフステージ、困りごと、困りごとの要因となった発達障害についてまとめると、ライフステージが上がることによって、今まで求められてこなかった能力が求められるようになり、これまで隠れていた発達障害の特性が表面化し、発達障害当事者は困り感を抱え、その結果生きづらさを感じやすくなっていると考えられた。

また、発達障害と診断される女性の増加が伺える。ライフストーリー分析により、診断を受けたライフステージは専業主婦、就学中、就労中、子育て中と異なるが共通して、ライフステージが上がり、社会に出て生じた困りごとによって「自分が発達障害かもしれない」と気づいていることがわかった。

女性の社会進出がどんどん進んでいく世の中で、女性が男性に追いついたことそれが発達障害を診断される女性を増加させたと考えられる。

発達障害の認知の広がりにより、「発達障害」という言葉を目にする機会が多くなってきている。興味本位で発達障害について調べると、自身が発達障害の特性を持つことに気づく人が出てくると考えられる。「発達障害」と検索すると、ADHDチェックリストやアスペルガー症候群チェックリストなど、自身に発達障害の特性があるのか確認できるツールが多数出てくる。さらに、発達障害の特性を持ったことを否定せず、前向きに語りかける記述や漫画のセリフから、今まで自分の努力不足によって、様々なことがうまくいかないと思い込んでいたが、そうではなく、別の原因があり、自分の努力不足ではない。と思うきっかけとなるのではないかと考える。

「診断を受けた後の様子(困り感)・変化」より、なんらかの方法で発達障害を知り診断を受け、発達障害について述べた、書籍、インタビュー等により、これまで抱えてきたなんとなくの違和感が言語化され、困り感の解決の糸口になっているでしょう。この、発達障害の認知の広がり、は、「発達障害に気づかせる力」を働かせ、発達障害者に問題解決の糸口を提供していると言えると考えられる。

## 結論

- ・ライフステージがあがることで、困りごとが生じ、特性が表面化してきている。
- ・女性の社会進出により女性が男性に追いついたことによって発達障害と診断される女性が増加した。
- ・発達障害の認知の広がりにより、「発達障害に気づかせる力」が働き、発達障害の特性を持つ人が、自身の発達障害者に気づきやすくなった。
- ・発達障害を知り、自身の発達障害に気づき、診断を受けることで、自分が発達障害の特性により、困り感を感じていたことを自覚し、生活を改善したり、自己肯定感が高まったりと、発達障害の診断が、困り感の解決の糸口となっている。

## 今後の展望

本研究では、成人女性発達障害当事者のライフストーリーをもとに、発達障害者個人と、社会の発達障害の捉え方や社会情勢等の両方に視点を当て、現代の社会の状況が、成人女性発達障害者に与える影響を調べることを目的として行った。自己語りによるライフストーリーを分析したものの、分析させていただいた発達障害当事者の生の声を聞くことができなかったことから、本論文筆者である私の解釈が含まれてしまったことが考えられるため、可能であれば今後インタビュー調査を行い、発達障害当事者のライフストーリーをさらに正確に理解したいと思う。ライフストーリー分析を通して、実態の把握にはつながったものの、本研究を始めた際に、最初に掲げた、「発達障害を持つ女性が輝ける社会を築くには」という問いの解決には至らなかった。日本の10人に1人が何かしらの発達障害を持っていると言われている現在、誰にとっても発達障害は他人ごとではないと考える。発達障害の理解を広め、発達障害者が、世間との障壁を感じる機会を少しでも減らせるような行動をしていきたいと思う。

### 参考文献

・医者も親も気づかない 女性の発達障害 青春出版社 岩波明  
・最新図解女性の発達障害サポートブック ナツメ社 本田秀夫・植田みおり等

### 謝辞

本研究の実施にあたり、担当教諭、田村先生には丁寧なご指導をいただきました。ありがとうございました。